

国語国文学

エビメケンオンセンゲンナカジマチョーウワマ
愛媛県温泉郡中島町宇和間方言資料

瀬戸内海言語資料室ゼミナール

町 博光・上野 智子

茂田 恵・室山 敏昭

1. 目的・方法

昭和51年3月、瀬戸内海言語資料室の開設にともない、瀬戸内海言語資料室ゼミナールが発足した。毎週一回の例会をもち、瀬戸内海域・沿岸域の方言を中心とした共同研究を行い、本資料室のさらなる充実と発展に努力している。

ここに提示する方言資料は、本ゼミナールの研究成果の一端である。

一般に、なまの方言資料として最も貴重な録音資料は、いかなる精巧な機器をもってしても、その完全保存に限界があるといわれる。50年、あるいは100年後の研究に思いを馳せるとき、録音資料の文字化作業は、必要不可欠な仕事としてわれわれに課されている。この種の記録資料は、すでに多くの研究者によって手がけられてきたが、現時点で、録音資料の精確なコピーともいえるものは稀少である。

本ゼミナールは、四人のメンバーが一同にひとつの録音資料を囲み、正確な文字化をこころがけ、質の高い方言資料作成を共通の目的とした。

今後も、継続して、諸方言の記録に努め、瀬戸内海言語研究の深化・拡充を図りたい。

2. 調査

1) 調査法

土地はえぬきの老年層(65~80歳)男女の自然会話を、人物を替えて、合計6時間、録音した。

話はずみやすい話題として、①生業(ここでは農業) ②家族・親族・婚姻 ③年中行事・子供時代の思い出(遊び・学校など) ④昔話を胸中に用意し、土地人の司会者、あるいは調査者が、会話のなめらかな進行と、変化に富んだ生きのよい方言会話の記録とに心を砕いた。幸い、調査に協力して下さった方々が、理想的な方言の話し手であったため、調査者の労は少なく、きわめて自然な方言会話を録音することができた。

録音は、雑音の少ない座敷で、話し手と聞き手とが円くひとつの卓を囲み、二台の小型録音機(ソニーカセットコーダ マイクインマチック70Ⅱ TC-1270A・ビジネス1030 TC-1030)を操作して行った。

2) 調査地点・調査期間

愛媛県温泉郡中島町宇和間は、瀬戸内海に浮かぶ中島(面積22km²)の西部に位置する。人口465人、戸数125戸(昭和51年2月現在)の、まとまりのよい集落である。柑橘類の栽培が盛んで、農業生産高の大半をみかんが占める。昔は、大豆・麦・芋の畑作が主であったらしい。大洲藩の年貢を大豆で納めたといわれる。とくに、西隣の山口県大島との交易は盛んであった。

期間は、昭和51年7月10日・11日の2日間を要した。

3. 研究担当者・調査協力者

録音は、上野智子(文学研究科博士課程後期1年)・茂田恵(同博士課程前期1年)の2名が担当

し、これを、町博光（同博士課程後期2年）・上野・茂田の3名が、各々6～7分ずつ文字化した。作業の結果は、十数回に分けて例会での報告形式をとり、室山敏昭（文学部教官）を加えた4名のメンバーが、毎回2～3時間にわたる検討を重ねた。

現地では、上田孔一氏（農業）の懇切な計らいにより、理想的な話者を得たばかりか、なごやかな雰囲気の中で、話し手・聞き手ともどもに、うちとけた場を共有することができた。

また、宇和間出身の上田千鳥氏（文学部4年）には、文字化の草稿に目を通してもらい、意味の不明な箇所について教示を得た。

このほか、お世話になった方々に、心から御礼を申し上げる。

4. 宇和間の方言（概説）

1) 音声・アクセント

<音声>

① 特色音に [wo] [we] [ʃe] [ɔa] がある。

ソ^レラー（それを） ス^ウエテ（据えて） シ^アワシ^エ（幸せ） シ^ファイ（四杯）

② 音変化には次のような種類がある。

[i] > [u] ワ^ルキ（割木） [i] > [e] サ^カエ（境） [s] > [h] オ^カーハン（お母さん） ホ^イテ（そして） [m] > [b] サ^ブイ（寒い） [b] > [m] カ^ムキ（歌舞伎）
[b] > [p] カ^サプタ（瘡） [z] > [d] ダイ^リョー（材料） [r] > [d] サン^ダン（産卵）

③ 連母音同化では [ai] の変化が多彩である。 [ai] > [ae], [a^ə], [a^ɨ], [e^ɨ], [e^ə], [a^ɨ], [ja], [æ:]（用例は 5.資料を参照）ほかに、[oi] > [o:] オ^イト^ータラ（置いておいたら） [ui] > [i:] カ^ミイーサン（髪結いさん） などがある。

④ 長音化は盛んである。「ソ^レローソ（それこそ）」「ノ^ーチニワ（後には）」「セ^キユー（石油）」「オ^ヒーサン（お日さん）」短音化もある。「オ^イテモ（多いとも）」「ソ^シタリ（そうしたり）」

⑤ 有声化には、「ホ^ンドニ（本当に）」「ト^ードー（とうとう）」、無声化には、「ア^ンス（杏）」などがある。

<アクセント>

中国的なアクセントを基調として、部分的に四国的なアクセント（ショ^ーガノ ハ^オ）が聞かれる。文アクセント傾向では、高音連続（ホ^イデ ア^ノ モ^ー エ^ー ワ^スレンガ^ー）が頻繁に起り、そのさい、「サ^サラー サ^シトイ^テ」のようなアクセントを生じやすい。また、文末の卓立声調が連続して現われる（ヌ^カブ^クロ ヌ^ーテ ナ[。] オ^ナ オン^ナワ ナ[。]）。語アクセントでは、しばしば、抬頭後起型が聞かれる（イ^マワ、タ^ベテ）。

2) 文法

① 格助詞。場所・方向を示す「に」は「エ」になる。「ホ^ゴエ イ^レテ（ホゴに入れて）」手段を示す「で」に「カラ」が下接する。「ニ^ブラ^ンプ^デカラ（二分ランプで）」

② 接続助詞。「て」に「テ」が下接する。「コ^ワイ^テテ コ^ワイ^テテ（恐くて恐くて）」「キ^レーテテ キ^レーテテ（きれいできれいで）」「から」に「ニ」が下接する。「ト^ッテカラニ（取ってから）」「けれど」に「ガ」が下接する。「ホ^ジャ^ケン^ドガ（そうだけれど）」「ながら」は「モテ」で表わす。「オ^モイ^モテ タ^ベル（思いながら食べる）」

③ 副助詞。限度の「ギリ（だけ）」が盛んである。「ワ^シラ^ギリ（わたしらだけ）」「ツ^バメ^ギリ（燕だけ）」「しか」が「ホカ」「ホケ」となる。「フ^タニ^ギリ^グライ^ホカ（二握りぐらいしか）」「チ^ーマイ^ノホ^ケ（小さいのしか）」

④ 接辞。「ら」が自在に用いられる。「キ^ョー^ラデ^モ（今日などでも）」「ヌ^ワラ^ナ（怒和あたり）」

では) 」

- ⑤ 断定法では、「ジャ」のほかに「ヤ」「ダ」が用いられる。「オッタンジャ (いたのだ) 」 「ムカシヤッタラ (昔だったら) 」 「ヤルンダケン (やるのだから) 」
- ⑥ 否定法では、「ン」のほかに「デ」「ズクニ」「ナンダ」が用いられる。「アワイデモ (会わなくても) 」 「ナロワズクニ (習わないままに) 」 「ニゲラチンダ (逃げなかった) 」
- ⑦ 推量・意志法では、「よう」が拗音化しやすい。「クリョ↑ (くれるだろう) 」 「タビョー (食べよう) 」 また、過去の推量に「ナカットロー (なかっただろう) 」 「ナラナンドロー (ならなかっただろう) 」がある。
- ⑧ 進行態・継続態は、各々「～ヨル」「～トル」で表わす。「アソビヨル (遊んでいる) 」 「ナツトル (なっている) 」
- ⑨ 待遇法では、文末調「ナー」が「ノー」より上品位に用いられ、「ワイナー」「ゾイナー」「ワイノー」「ゾイノー」などの複合形態を有する。ほかに、「ライ」「ガイ」「ゾナ」「デー」などがある。また、「ドレモ オトリー ナ。(どれでもお取りなさい。)」 「アンタノ オミセー。(あなたのお見せなさい。)」のような尊敬表現がある。

3) 語 詞

- ① 形式名詞「オリ」が頻繁に用いられる。「コノ オリ (この項) 」 「コンマイ オリ (幼い頃) 」 「イタ オリ (行ったとき) 」
- ② 副詞は多彩である。「ヨイヨ (いよいよ) 」 「サイサイサイニ (しばしば) 」 「ジョージュー (いつも) 」 「ドーテテ (どうしても) 」 「マルタマ (全部) 」

なお、他の品詞については、5.資料を参照されたい。

※概説の用例は、5.資料および現地での聴録カードに拠った。

5. 資 料

<凡 例>

- 一 1. 文字化は、表音的カタカナ表記によった。
2. 原則として、話部単位に分ち書きを行った。
3. 各文は、特異な音調 (大半は下降調) と音の著しい断止・間にもとづいて認定した。
4. 各文の末尾に句点「。」を施した。
- 二 1. アクセントは、高音部「—」を付して示した。
2. 高音部が連続し、しかも後の部分がさらに高くなる場合は、「—」で示し、逆の場合は、「—」で示した。
3. 文末部に急上昇調の認められる場合は、「—↑」で示し、急下降調の認められる場合は、「—↓」で示した。
- 三 1. 強勢の認められる箇所は、ゴチック体で記し、きこえの弱い箇所は、小字で記した。
2. あいづちなどは、() に入れて示した。
3. 言いかさなりの部分には、「……」を付した。
4. 聴取不可能な部分は、「〜」で示した。
- 四 1. ひとまとまりの話題ごとに、題目をつけた。
2. 話者は記号で表した。また、調査者の発言は、漢字・ひらがな表記にした。
- 五 1. 共通語訳は、原則として逐語訳とし、文意をとるために必要な補足・説明は、() に入れて示した。

2. このほか、場面や、音声・アクセント・文法・語詞上の注意すべき事象については、注を施し、末尾に一括して掲げた。

食生活いまむかし (6分52秒)

- A 野瀬サト氏(女 明治30年生 80歳)
 B 脇坂忠衛氏(男 明治38年生 71歳)
 C 上田孔一氏(男 昭和3年生 47歳)
 D 上田千鳥氏(女 昭和30年生 21歳)
 E 上野智子

A イマノ ヒトワ ホンドニ ^(注1)ゴクラク ヨナー。 キタイ モノ キテ タベタイ モノ
 今の 人は ほんとうに 極楽だ よねえ。 着たいものを 着て 食べたいものを
 タベテ。 ホレガ ^(注2)アンタ タベルモン ユータラ ナニ。 ソイコソ ハズカシー コトジャ
 食べて。 ^(注2)それが あなた 食べるものと いったら ねえ。 それこそ 恥ずかしい ことだけ
 ケンドガ ^(注3)ナンポー ワキサカジャ ユーテモ ナー。 モー ^(注4)ホゴノイヲデモ ニーサン
 れども いくら 脇坂(家)だと いても ねえ。 もう ^(注4)カサゴ(魚名)でも 兄さん、
 アンタ ^(注5)チーマイノ ^(注6)ホケ ワタシラー アタランノヤケー ナー。 ^(注4)チーマイノエー モ
 あなた、 ^(注5)小さいの ^(注6)しか わたしたちには 当たらないのだから ねえ。 ^(注5)小さいのに も
 テテ ^(注7)ナー。 ^(注8)オミソオ ^(注8)ダエーブ イレテ ナー。 (C エー。) ^(注9)ホイテ ^(注10)ム
 ってきて ねえ。 ^(注8)お味噌を ^(注8)だいぶん 入れて ねえ。 (C ええ。) ^(注9)そして(魚を) ^(注10)む
 シッテ ^(注11)ホイテ ^(注11)ソレヲー ^(注11)オムギノ ^(注11)ゴハンデ ^(注11)タベヨッタ ^(注11)ソヨー。 (C ホー。) へー。
 して して それを お麦の 御飯で 食べていた のよ。 (C ほう。) ええ。
^(注11)ホイデ ^(注11)アンタ ^(注11)モー ^(注11)チーター ^(注12)オケーソナラ ^(注12)アノー ^(注12)オミソが ^(注13)ナンジャケネァ オ
 それで あなた、 ^(注11)もう ^(注11)少し(魚が) ^(注12)大きいのなら あ、 ^(注13)お味噌が 何だから お
 ショーユデモ ^(注14)カケテ ナー。 (C エー。) ^(注14)タベリヤナイケドガ オ
 醤油でも ^(注14)かけて ねえ。 (C ええ。) ^(注14)食べれば(食べられぬことは) ないけれど お
 ショーユ ^(注15)カケタラ ^(注15)ホイテ ^(注15)オメァー ^(注15)ホゴノイヲジャケネァ ^(注15)ホータラ ^(注15)アタマバツカ
 醤油を かけたら して おまえ、 ^(注15)カサゴだから ^(注15)そうしたら ^(注15)頭ばかり(が大
 リジャケー ナー。 ^(注16)ミガ ^(注16)ヨーケー ^(注16)ニャーンジャケー。 ^(注16)ホイジャケネ ^(注16)モー ^(注16)ミソデ
 きい)のだから ねえ。 身が たくさんは ないのだから。 ^(注16)それだから ^(注16)もう 味噌で
 モ ^(注17)イレテー ^(注17)アノ ^(注17)ダエーブニ ^(注17)センニャー ^(注17)オカズニ ^(注17)ナラナンドロ。 (C エー
 も 入れて あ、 ^(注17)たくさんに ^(注17)しなければ ^(注17)おかずに ^(注17)ならなかつただろう。 (C ええ
 。) ^(注17)ホイジャケン ^(注17)モー ^(注17)ムカシノ ^(注17)コトオ ^(注17)ユータラ ^(注17)ホタラ ^(注17)モー ^(注17)ソノ ^(注17)ソレナラ
 。) ^(注17)そうだから ^(注17)もう ^(注17)昔の ^(注17)ことを ^(注17)言ったら ^(注17)そうしたら ^(注17)もう ^(注17)その ^(注17)それ(一品)
^(注18)ソレデ ^(注18)ゴハン ^(注18)タビヨッタ ^(注18)ンヨ。 (C へー。 ^(注18)ソージャロー。) ^(注18)イマ
 なら ^(注18)それ(一品)で ^(注18)御飯を ^(注18)食べていた ^(注18)のよ。 (C はあ。 ^(注18)そうだろう。) ^(注18)今の
 ノヨニ ^(注18)フタシナ ^(注18)ミシチジャ ^(注18)チインジャ ^(注18)ナ。 (C エー。) ^(注18)ソレデ ^(注18)タビヨッタリ。
 ように ^(注18)二品 ^(注18)三品では ^(注18)ないのだ ^(注18)ね。 (C ええ。) ^(注18)それで ^(注18)食べていたり。(
^(注19)コンコデ ^(注19)ナ。 (C アー。) ^(注19)エー。 ^(注19)ホイデ ^(注19)アノ ^(注19)モー ^(注19)エー ^(注19)ワスレン
 または) ^(注19)たくあんで ^(注19)ね。 (C ああ。) ^(注19)ええ。 ^(注19)それで ^(注19)あの、 ^(注19)もう ^(注19)よく ^(注19)忘れもせ

ガー アノー イッペン^(注20)ドマ ショーガノ^(注21) ハオ トリ^(注22) 「トッテ コヨ。」 「トッテ コイ。」
 ぬが あ、 ーべんなどは 生姜の 葉を 「とって こい。」 「とって こい。」
 ユーケン ナ。 ホイテ 「ショーガノ ハオ トッテ コーイ。」 ユーケニ 「ショーガ
 と 言うから ね。 そして 「生姜の 葉を とって こい。」 と 言うから 「生姜の
 ノ ハオ トッテカラニ^(注23) ドースル^(注24) ソイノー。」 オモータラ ナ。 ホタラ ショ
 葉を とって どうするのだろう。」 と 思っ(てい)たら ね。 そうしたら 生姜
 ーガノ ハー オ アンタ^(注25) キーレニ^(注26) アロテ ナ。 キザンデ ナー。 (C ホー。) ホイ
 の 葉を あなた、 きれいに 洗って ね。 刻んで ね。 (C ほう。) そし
 テ アレワ ドーユヨーニ シテ オヒタシニ シタ カドー カー ナ
 て あれば どういうように (料理) して (それとも) おひたしに した か どう かは、 ね

。(忘れたけれど)。

C タベラレルンジャ^(注27)ロー カナ。 ショ (A エー。) ショーガノ ハー タベ~~~~
 飲べられるのだろう かな。 (A ええ?) 生姜の 葉を 食べ~~~~

A ムカシワ タベヨツタンジャ^(注28)ケー。 タベタンジャ^(注29)ケー。 ワタシラワ。
 昔は 食べていたのだから。 食べたのだから。 わたしたちは。

E 固くなかったですか。 (A エー。) 固く、コワク^(注30)なかったですか。
 (A ええ?)

A ジャ^(注31)ケー ソレガ ソノ 「ユガイタツ^(注32) トロー^(注33) カー。」 オモーン ヨナー。
 だから それが その、 「ゆがいていただろう か。」 と 思うの よねえ。

C カーライッ^(注34)デショ。 アレワ。 (A エー。) ~~~~~
 辛いでしょ。 あれば。 (A ええ?) ~~~~~

A カラナイ。 ソラ カラナイ ワイナ。 カラカッタラ コドモジャ^(注35)ーケ タベンケド
 辛くない。 それは 辛くない わよね。 辛かったら 子どもだから 食べないけれど
 ナー。 ワシラモ タベタンジャ^(注36)ケー。 ホイジャ^(注37)ケネ ムカシノ タベルモン
 ねえ。 わたしたちも (子どもの頃) 食べたのだから。 そうだから 昔の 食べるものと
 ユータラ ナ。 モー ソノー オデアイコンナラ^(注38) オデアイコト イモト タイタラ ソレギリ。
 いったら ね。 もう その お大根なら^(注39) お大根と 芋と 炊いたら それだけ。
 (C エー。) ホカニ モ ソレデ オルホカニ タビョー オモタラ コンコ
 (C ええ。) ほかに もう それで いる (食べる) ほかに 食べようと 思ったり たくあ
 。 (C エー。) エー エー。 モー ホンドニ ナー。 ウシガ タベルヨナー モ
 ん。 (C ええ。) ええ、 ええ。 もう ほんとうに ねえ。 牛が 食べるような も
 ンデー ワタシラ ソダッタル^(注40) ン。

ので わたしたちは 育っている の。

C マー ミンズーモ オーミンズー^(注41) ジャッタシ ナー。
 まあ、 人数 (家族) も 大人数だったし ねえ。

A エー。 ミンズーモ マー オイカッタ^(注42) ヨナー。 (C エー。 ムカシワ。) フターイ
 ええ。 人数も まあ、 多かった よねえ。 (C ええ。 昔は。)

オジャ^(注43)ケン ナー。 ンカ^(注44) モー ホンドニ。
 ねえ。 もう ほんとうに。

C ムカシ^(注45)ャー ホント コノウチノ コドモーモ ゴミンモ ログニンモ オルシ ナー。
 昔は ほんとうに この家の 子どもも 5人も 6人も いるし ねえ。

A エー エー。 ホジャケネ マ ジューニンヤラ ソッ ウー ジューニニン オル イ
 ええ、 ええ、 それだから まあ、 10人やら 12人 いる 家
 ヤー アッ サンボデモ アッタンジャケン ナ。 カテアッポカラジャッタンジャケン ナ
 は (137) いくらでも あったのだから ね。 (子どもは) 5人以上だったのだから ね
 ー。 (C エー。) ホイジャケネ モー ナマス ユータラ モー デアイコ ツイテ
 え。 (C ええ。) そうだから もう なますと いったら もう 大根を ついて
 ナ。 オナマスニ スル。 ソダラ モー ソレギリデカラ オカズニ スルンジ
 刻んで) ね。 おなますに する。 そうしたら もう それだけで おかずに するのた
 ジャケ ナ。 (C エー。) ソイデカラニ オム ゴハンワ アンタ オコメワ アンタ
 から ね。 (C ええ。) それで (141) (142) 御飯は あなた、 お米は あなた、
 モー コイヨ ドコニ アルカ ワカランヨーナ オムギギリデ (143) タベタンジャケ。 ー。
 もう いよいよ どこに あるか わからないような お麦だけ(の御飯)で 食べたのだから。
 (C ホー。) ワカシラ ソダットルンジャケ。 (C アー。)
 (C ほう。) わたしたちは 育っているのだから。 (C ああ。)

D オジーチャンリ チラット チガウンデス。 ヤッバリ。
 おじいちゃんは ちょっと 違うのですか。 やはり。

A オジーサンラガヨニ ムッタラ マタ チーター ゴハンモ ナー。
 おじいさんの(時)代に なったら また 少しは 御飯も ねえ。

B ソイデモ ワシラ ゴハン ユーデモ ナー。 ムカシバサシニ ナルケド オーケナ
 それでも わしらは 御飯と いったも ねえ。 昔話に なるけれど 大きな
 アッ サツ ムッタラ シ シタミ (A シタミ。) サンスリヤイ ナー。
 あの 夏に なったら (144) シタミ(米掲策) (A シタミ。) 何する(使う)よ ねえ。
 (A ウン。) フジンコート ダンシユターター サカイガ アリコ アリコッタ
 (A うん。) 婦人用と 男子用とは (シタミの) 境(区別)が あった

リエ。
 (145)
 よね。

A サー サー サー サー。 ソレ ヨ。 ワカシガ ソーシヨッタンジャケ。 ワタシヤ モ
 さあ さあ さあ さあ それ よ。 わたしが そうしていたのだから。 わたしは も
 サンニンノ コー コドモニ ナ。 アノー マー ホントニ オムギワ イッショノ
 う 3人の この 子どもに ね。 あの(150) まあ ほんとうに お麦は 1升の
 ナカエ ナー。 オコメオ ユータラ ニゴハンジャケ。 (C アヤー。) エー。 イッ
 中に ね。 お米を、と いったら 2合半だから。 (C あら。) ええ。 1升
 ショノ ナカエ ニゴハン イレタラ ジョートー ヨー。 (C エー。) スワラナ ナー。
 の 中に 2合半 入れたら 上等 よ。 (C ええ。) 怒(地名)辺で
 モー テ テデ ニギッテカラ フタニギリグライホカ オコメ イレン ウー
 はねえ。 もう 手、手で 握って 二握りぐらいしか お米を 入れないと いう
 ハナシオ キータ コトガ アル ウエ。 (C ハー。) ホジャケド マー デモ ニゴ
 話を 聞いた ことがある わよ。 (C はあ。) そうだけれど まあ、 でも 2合
 ハンワ イリコッタ ワエ。 デ ニゴハン ウエー ソーロリット。 ムギ
 半は 入れていた よね。 それで(米) 2合半を(麦の)上に そろりと(置く)。 麦と
 ユータッテ マルムギジャケ。 マルムギ イッペン タイテ ホイテ コンド コンド ソノ
 いったって 丸麦だから。 丸麦を 一ぺん 炊いて そして 今度、 今度 その

オ オコメ オ ソノウエ ソーロリッ ット オイテ (C エー。) ソーロリッ ット オ
 (注55) お米を その(丸麦の) 上に そろりと 置いて (C ええ。) そろりと 置
イテ タク ンヨナ。 ホシテ ソノ ウエヲ アノー ソノ シタミ トルオリニ
 (注57) いて 炊くの よね。 そして その 上(の米)を あの、 その シタミに とるときに
ナ。 ウエヲ カテアッ ポエ トッテ (C エー。) ホイテ シタノ バツカシワ
ね。 上(の米)を 片方(の側)へ とって (C ええ。) そして 下の(麦)ばかりは
モー ワシト オジーサント (C ホー。) ウン。 アノ オカーハンラガ タベテ ナ。
もう わしと おじいさんと (C ほう。) うん。 あの、 あ母さんたちが 食べて ね。
 (C エー。) ホジャケ ワタシラー モー オコメワ ホンマニ カネヤ タイコデ
 (C ええ。) そうだから わたしたちは もう お米は ほんとうに 鐘や 太鼓で
タズネンニヤ ナイグラ イ ナ。 モー。(一同 笑) ホントー ヨ。 エー。 ソレデー
尋ねなければ ないぐらい ね。 もう。 ほんとう よ。 ええ。 それで
ナ。 モー ホントーニ アノー オモチデモ ナー。 アノ ソノ ヨモギノ オモチガ
ね。 もう ほんとうに あの、 お餅でも ねえ。 あの、 その、 蓬の お餅が
タベトモ ナインジャ ンニャン。(C エー。) ホジャケ ンドガ アー ミツツナラ
食べたくも ないのだ ねえ。(注59) (C ええ。) そうだけれど ああ、 3つなら
ミツツ イツツナラ イツツ クリョー。(C エー。) ソリョー タベンニヤ
3つ 5つなら 5つ(親が) くれるだろう。(C ええ。) それを 食べなければ
ナラン ノヨナー。(C アー。) ホデ 「タベンニヤ ナランノニ ミョー イ。
ならない のよねえ。(C ああ。) それで 「食べなければ ならないのに ねえ、よい。
ヨモギモチガ アー。 イツトルノ アー ヒトツー カエテ クレリャー エーノ
蓬餅が なあ。 入っているのを ああ、 ひとつ(白餅と) 替えて くれれば いいの
ニ。」ト オモーテモ ナー。 ソレガ イエンノ ジャ。 ソレガ ソノ ナンカ イヤ ア
に。」ト 思っても ねえ。 それが 言えないのだ。 それが その、 何か 言うと あ
ノ マー ワシラ ギリノ ナンナラ ナ。(C エー エー。) ソリャ イエモ シ
の、 まあ わたしたちだけの 何なら ね。(C ええ、 ええ。) それは 言えも し
ョーケド。(C エー。) フターリノ ナンジャ ロ。(注61) (C エー。) ホジャケ ネ ゼツ
ようけれど。(C ええ。) 二人の 何だろう。(C ええ。) そうだから 絶対
タイ イエンノ ジャ ナ。 ホイデ モー ナンボ サカナガ コモテモ ナ。(C エー。)
言えないのだ ね。 それで もう いくら 魚が 小さくても ね。(C ええ。)
イワレ ンシ ソイデ モー オモチガ ソノー ヨモギガ オイテモ イワレ ンシ。(C
言われぬし それで もう お餅が その、 蓬が 多くても 言われぬし。(C
アー。) ホイデ モー オー ホントニ タベルモン ユータラ モー ソイ ヨナモンデ
ああ。) それで もう (注62) ほんとうに 食べるものと いつたら もう そういうようなも
ワタシラ コー マイ オリカラ ズー ット ソダッ テ キトル ンヨ。 ヘヤ ケー
ので わたしたちは 小さい 頃から ずっと 育って きている のよ。 そうだから
イマワ ナー。 「コラ ドシタ コト ジャロ カ。 イツモ カツ モ オシ ョー ガツ ジャー ガ
今は ねえ。 「これは どうした ことだろう か。 いつも いつも お正月 だが
オマツ リ ジャー ガ (一同 笑) オシ ョー ガツ ミタイ ナ。 オオマツ リ ミタイ ナ。」 ヨー オ
お祭り だが (注64) お正月 みたい だ。(注65) お祭り みたい だ。」と よく 思
モイ モテ タベル ンナ ヨナー。
 (注66) いながら 食べる のよねえ。

C コノゴラー モー ムギナンカ タベルヨーナ ウチワ モ めったに ナイグライデショ
この頃は もう 麦など 食べるような 家は もう ないぐらいでしょ
う。

B ムギ タベルモァー アルマージャ ナイ カー。 (C ナー。)
麦を 食べる者は (C ねえ。)

A ンー。 ナイグリャ。 ホイジャケン モー ワチシラワ ホジャケネ ムギ タベタラ エ
ん。 ないぐらい。 そうだから もう わたしたちは そうだから 麦を 食べたら よ
ー オモウケド ナー。 ホヤケー ヨソヨリ オソマデ ワシァー 「ムギ タベサシト
いと思うけれど ねえ。 そうだから 他家より おそくまで わたしは 「麦を 食べさせて
クレ。 チート イレサシトクレ。」 ユーテ フタニギリオ グライホズ イレ
おくれ。 少し 入れさせておくれ。」と 言って (手に) 二握りぐらいほど (の麦) を 入れ
テ ナ。 タキオツタケンド モー ハヤ サレモ デケンヨニ ナットロー。
て ね。 炊いていたけれど もう はや、 それも できないようになってい
るだろう。

C カラダニモ エーラシ ナ。 ムギノ ホーガ。
体にも いいらしい ね。 麦の 方が。

A エー。 ムギワ。 (C アー。)
ええ。 麦は。 (C ああ。)

B アー ユーケンド ナー。 モー ムギー タベルモァー
ああ 言うけれど ねえ。 も 麦を 食べる者は

A ワチシラワ ジャケ アンタ モー コンマイ オリニャ モー ソーユオナモン
わたしたちは だから あなた、 もう 小さい 頃には もう そうい
うなものを タベテ ズーット フトット ンヨ。 (C アー。)
エー。 ホイデ モー ホント 食べて ずっと 大きくなっている のよ。
(C ああ。)
ええ。 それで もう ほんと ウー ナンジャガ ノー。 ソノゴロニャ
ホジャケネ イワシァミー ヒクノニ デビキ 上に 何だか
ねえ。 その頃には そうだから 鰯網を 引くのに 出引き
ー ユーテ イキョットロー。 (C エー。)
デ ワシラー ソノー チーハンガ ナエ と 行って
いただろう。 (C ええ。)
で、 わしらは その チーハンガ (い) ー
ンジャケー。 オトコノコガ ナエー
ンジャケー ナ。 オナゴエ ワシラー ないのだから。
男の子が (い) ないのだから ね。 女 (の子) わしら (のよ
うな) コーマイノガ イキョットタンジャ。 ホイテ ソレニ ナー。
イッセン モロテ イク ン。 小さいのが 行って
いたのだ。 そして それに ねえ。 1銭 もらって 行く の。
イクンジャ。 (C エー。)
イッセン モロテ イマ カタオカノ ヘヤニ ナ 行くのだ。
(C ええ。)
1銭 もらって、 今 片岡の 部屋 (分家) に ねー。
アノー オムツツェン ユーテ オツタガ ナ。 アノ コーンマイ
コレグライノ ハえ。 あ、 おむつさんと 言って いたが ね。
あ、 小さい これぐらいの 箱 コエー オカシオ
イレタノー コレグライ タカサニ ツンダノー オイトル ンヨナ。
に お菓子を 入れたのを これぐらいの 高さに 積んだのを 置
いている のよね。 (C アー。)
ホイテ アミー イキシナニワ ナ。 ソコイ ヨツテ
イッセンノ オ (C ああ。)
そして 網 (引き) に 行かけには ね。 そこに 寄って 1銭の
おカシ コーテ ナ。 (C エー。)
ホイテ イッセンデモ フタツモ ミツツモ えて 菓子を 買って ね。
(C ええ。)
そして 1銭で (お菓子が) 2つも 3つも あ

ツタンジャケー。(C ホー。) エー。ソレ モッテー ホイテ アミヒキ カ
 った(買えた)のだから。(C ほう。) ええ。それをもつて そして 網引きに 籠
 ゴ サゲテ アミヒキニ イテカラ (C エー。) ホデ モロテ ナー。トテ モン
 をさげて 網引きに 行って (C ええ。) それで もらつて ねえ。とつて 戻っ
 テー (注79) アノー ソレガ マター アノー シロウチノ ホーデ ヒーテ ヒーダ(笑)
 て あの それが また あの 城内の 方で 引いて、引いた(のを) (笑)
 モロテ モドリヨノヤケー モドルマデニヤ ハヤ ウチヨ(注80)。 (C エー。)
 もらつて 戻っているのだから 戻るまでには 早くも(網を) 打つだろう。(C ええ。)
 ソレデモ モー モロター オモーテカラニ ヨロコンデ モドル。(C エー。) エー。
 それでも もう もらつたと思つて 喜んで 戻る。(C ええ。) ええ。
 ソイヨニマデ シタ ソゾ子。 ワタシワ。 ワタシラ。
 そういふようにまで した のよね。 わたしは。 わたしたちは。

麦すりのこと (2分42秒)

A ホヤケン ソコエ ムギヲ アノ ワキサカジャケン ナー。 ムギオ コナ シテ ホ
 だから そこへ 麦を あの、 脇坂(家)だから ねえ。 麦を こんなにして そ
 テ オーケナ ホゴエ(注81) イレテ ニノーテ ホイテ アノ アスコエ クダツテ アスコ
 して 大きな ホゴ(籠)に入れて 背負つて そして あの あそこへ(注82) 下つて あそこ
 デ ムギオ タテタリ ショッタ(注83) ンヨ。 ホヤケー オーケナ マツノ シタデー ワシラー
 で 麦を たてたり していた のよ。 だから 大きな 松の 下で 私たちは
 モー アソビヨツタンジャケー。
 もう 遊んでいたのだから。

C ソノ ホーノ ムギオ コナスンワ ナニオ ツカイヨツタンデス カ。
 その 方の 麦を 粉にするのは 何を 使っていたのです か。

A ソノ ブンノ イチッパン(注84) ハジメワ アノ ウスデ ツキョッタ ン。 アノ ウスデー。
 その 分の 一番 はじめは あの 臼で ついていた の。 あの 臼で。
 ウチモー コレ イマワ ヘテ ソトィ ナイケド ウオ(注85) アノ コノ ア アスコノ
 うちも これ 今は そして (家の)外に ないけれど(注86) あの この あそこの
 キワエ(注87) ウス スウエテ(注88) ホイテ オジーサンガ ツイテ ヘデ ワシガ マゼテ コナシヨツ
 際に 臼を 据えて(注88) そして おじいさんが ついて それで 私が ませて 粉にしてい
 タ ン。
 た の。

C ダイガラデ ナ。
 (注89) だいから(合唐臼)で ね。

A ダイガラ ヨ。 ダイガラデ ナ。 ツキョツタケ。 コレー ホシトルノオ ゼンブ ツツ
 だいから よ。 だいからで ね。 ついていた。 これに ほしているのを 全部
 タル(注90) ツツキョツタンジャケー。 オマカタノ(注91) オバーハンガ フ ナ(注92)(注93) ナンダイノ オバーハ
 ついていたのだから。 あなたの家の おばあさんが 何代の おばあさ
 ンニ ナルカ シランガ ウエダノ オバーハンワ アジー ヤスマサンノジャ ユーテ。
 んに なるか 知らないけれど 上田の おばあさんは 足を 休ませないのだ といっ

ア。 アジ- ア ツキョ^(註94)ッテモ カタイッポジヤ ダ- ショル カタイッポジヤ
 て。 ね。 足を (麦) ついていても 片一方では 出しながら 片一方では
 イレル カタイッポジヤ ダショル カタイッポジヤ イレル ユーテ アシ ヤスマサン
 入れる、片一方では 出しながら 片一方では 入れる といって 足を 休ませない
 ノジヤ ユー オバーハンデ アッタ^(註95) ノヨ。 (一同 笑) ノセノ オバーハンニト
 のだ という おばあさんで あった のよ。 野瀬(人名)の おばあさんに尋
 一テモ シットル ガ。 ソーユーナ オバー ソーユヨ- ニ ムカシノ モチア シ
 ねても 知っている わ。 そういような おばあ^(註95), そういように 昔の 者は し
 ヌッタ。 ソレカラ コンド 「ナントカシテ ノ^(註96)。 コレオー コノ イガオー コー ユヨ-
 ていた。 それから 今度 「何とかして^(註96) ねえ。 これを^(註97) この いがを こういよ
 ニ センヨ-ニ ノ-ナル キカエガ^(註98) デキン モン カエ^(註99)。」 ユーテ
 うに しないように (いがか) なくなる 機械が できない もの かいねえ。」 といっ
 イヨッタ----- ホイタラ マー カラサワ^(註100) モ マサ^(註101) マタ デキダシテ。 ヘデ
 言っていた----- そしたら まあ からさわ(殺竿) も また できはじめて。 それ
 キノ カラサワデ タタキヨッタ^(註102) コンダ 「カネ カネノ カラサワガ^(註103) デケタ。」 ユ
 で 木の からさわで たたいていたら 今度は 「金、 金の からさわが できた。」 と
 一テ 「ヤ-レ コレ カネナラ エー ウィ。」 ユーテ ヘデ カネノ カラサワ
 言って、 「やれ これ 金なら いい わ。」 と言っ、 それで 金の からさわ
 デ マタ バッタンコ- ヤリヨッタ。 ホタラ コンダー マタ 「ヒッパルー アノ クル
 で また バッタンコと やっていた。 そしたら 今度は また 「ひっぱる あの 繰る
 ナニガ キカエ^(註104)ガ デケタ。 ソレ^(註105) キカエ^(註106)ガ デケタラ モー エー コトジャー。」
 何が 機械が できた。 それは 機械が できたら もう いい ことだ。」
 ユーテ。 ホテ ソノ マタ キカエガ^(註107) モー ギッシリギッシリ リョ-ホ-カラ ヌ
 と行って。 そして その また 機械が もう ギッシリギッシリと 両方から こ
 二。
 う。

C エ-。 アレワ ナンヤラ イヨッタ。 ワシラモ アレワ。 コンバインニ ニタヨ-ナ
 ええ。 あれは 何やら 言っていた。 私たちも あれは。 コンバインに 似たような
 ナンヤラ イヨッタ ナ-。 (B ソレオ)ン ナマエワ。
 何やら 言っていた なあ。 (B それを)^(註108) 名前は。

B ナン イヨッタ カナー。 (咳)
 何と 言っていた かなあ。

A ムギスリ ヤル ユーテ。
 麦すりを する と言っ。

B ムカシジャケン ムギスリキカイ イヨッタ^(註109) ジャッタ ノ-。
 昔だから 麦すり機械 と言っていたのだった ねえ。

A ムギスリキカイ デ。 アレ ドノクリ^(註109) ヒッパリヨッタ^(註110) ジャケ-。 テデ ヒッパッテ
 麦すり機械 よ。 あれ 引っぱっていたのだから。 手で 引っぱって
 ミターリ ホテ マタ テオ ツカイ^(註110) ツケタ テオ^(註111) テデ ヒッパッテ ミターリ ナ。
 みたり、 そして また 手を つけて 手を 手で 引っぱって みたり ね。

B ソレカラ コジマニ。
 それから 児島(精米屋)に。

A コジマニ。

児島に。

B キカイオ コーテ ノー。
機械(注112)を 買って ねえ。

A ンデ ソノ マタ ソノ キカイガ マタ セワシーテテ セワシーテテ ミデカラニ
それで その また その 機械(注113)が また 忙しくて(注114) 忙しくて 見ない(注115)でおいて
ヘデ ワタスンジャケー ナー。 ミー イレチャー キッ ムギョ イレチャ
それで (刈った麦の束を) 渡すのだから ねえ。 箕に 入れては 麦を 入れては
ー ウエ ワタシテ アレ スルンジャケー モアスッゴイ セワシカッタンジャケ
上に (いる人に) 渡して あれ するのだから ものすごく 忙しかったのだから。
一。

B コンダー ソレガ スンダラ コンダー クリアゲ ナッテ ノー。
今度は それが 済んだら 今度は 繰り上げ(注120)に なって ねえ。

A コンド クリアゲ ナッテ。 ソコラ モー アノー。
今度は 繰り上げに なって。 そこらは もう あの。

B テンビデサエー。
てんび(注121)で(注122)さえ。

A テンビデカラニ クリアゲサエ スリヤー ハイリヨー ナッテ ノー。
てんびで 繰り上げさえ すれば 入りよく なって ねえ。

C ワシラノ トキニ イレマーシテ アルノニ ナー。
私たちの 時に(注123)

A アラ ホー カイ ン。
あら そう かい うん。(注124)

C ワシラー クリアゲ~~~~~ デ
私たちは 繰り上げ~~~~~ だよ

A ハジメワ ミデ アッタ ンデ。 (C ア ハー。) ゼンブ。 エー。 ミデ ウツシチ
はじめは 箕で あった のよ。 (C あ, はあ。) 全部(注125)。 ええ。 箕で 移しては
ャー ポント~~~~~ モー ソレコソ シタノ モナ セワシーコトジャッタ ヨ。
ポントと~~~~~(注126) もう それこそ 下の 者は 忙しいことだった よ。

す ず め 退 治 (2分35秒)

E (すずめ退治や蛇退治は) みんな子供の仕事だったわけですね。

A ソー ソー。 コドモノ シゴト。 ジャケー 「スズメ トロー ヤー。」 ユーテ
そう, そう。 子供の 仕事。 だから 「すずめを とろう よ。」 と言って
ナー。 ドーノコーノ ナエー。 モー オトコジャローガ オナゴノコジャローガ モー トリ
ねえ。 どのどのの ない。 もう 男であろうが 女の子であろうが もう とり
ニ アルキヨッタ。 アノー ハ アルキヨッタ ワエ。 (C ハー。) ソレコーソ。
に 歩いていた。 あの(注127) 歩いていたんだ よ。 (C はあ。) それこそ。

B スレ ソノ ソノ^(注128) ジブンニヤ ヨーケ オッタ ウェー。
それ その その 時分には たくさん いた よ。

A スズメガ マタ オツタンジャケニ。
すずめが また いたのだから。

B アノ^(注129) コソ オランケンド フー。 (C フーン。)
いないけれど ねえ。 (C ふうん。)

A コノゴロァ ドシタンジャロー カ。 コノゴロ スズメ オランガ。
このごろは どうしたのだろう か。 このごろ すずめは いないけれど。

C エサガ ナイ。
えさが ない。

B クーモンガ ナイケー。
食うものが ないから。

A エー。
ええ？

C エサガ ナイ。
えさが ない。

A ワシヤ アノ スズメノ オランノガ フシギデ モー スズメ ミヨー オモーテ ノ
私は あの すずめが いないのが 不思議で もう すずめを見ようと 思って ね
え。 マーヤイ ツレテ アルキ アルイテカラニ スズメオ^(注130) ミヨー ミヨー ミヨー
え。 まあやれ 連れて 歩き まわって そして すずめを見よう 見よう、 見よう 見
よう オモーテモ オランノジャ ガ。 コニヨーニ^(注131) コノ ホーデモ スズメ オツク
よう と思っても いないのだから。 このごろでは。 この 地方でも すずめは いたの
ンデー。 タイソー。 ソレガ オメァーシテ オランノデ マー アノー イワシ イルトコ
だよ。 たくさん。 それが 追い回して^(注132) いないので まああの 鱈を 煎る 所の
ラニ フー。 アスコラニ マ チカゴロマデ オッタ フー。
あたりに ねえ。 あそこのあたりに ま、 近頃まで いた ねえ。

C ムギモ ナイ コメモ ナイ。 ジャケ エサガ ナイケン ヨソエ イドーシタンジャ^(注133) ナ
麦も ない、 米も ない。 だから えさが ないから よそに 移動したのだ な
あ。

B ソージャ フー。
そうだ なあ。

A ホジャ フー。 ウチノ ココエ モー マイートシ スー スン デー。 コトシ
そうだ ねえ。 うちの ここに もう 毎年 巣を する (かける) んだよ。 今年も
モ スン ナニ シタケンドガ オランノジャ。
巣を 何 したけれども いないのだよ。

C ムカシジャッタラ ヒエイガ アル ナー。 (B エー。) アワガ デキルー モー
昔だったら^(注134) 稗が あるし ね。 (B ええ。) 粟が できるし、 もう
イロイロナ モンガ アツタケン ナー。
いろいろな ものが あったから ねえ。

A ホー ヨ。 ホー ヨ。 マ タベルモンガ ナイケン カノー。
そう よ。 そう よ。 まあ 食べるものが ないから かねえ。

C エサガ ナイケン モー ホカノ
えさが ないから もう ほかの

A ソイデモ スズメ ミョー オモーテカラニ- ワタシ(注135) イマデモ ククッ キョーラデ(注136)
それでも すずめを 見ようと 思って 私は 今でも ここ 今日なんか
モ ヤッバスィ スズメ スズメ オモー ンデ。 (C アー。) ツバメギリジャ ガ。
でも やっぱり すずめ すずめと 思うん だよ。 (C ああ。) つばめだけだ が。
(C アー フエッタ ナ。) ツバメワ フエタ ワエ。 ツバメギリガ ミエテ スズメガ
(C ああ ふえた(注139) ね。) つばめは ふえた よ。 つばめだけが 見えて すずめが
ミエンノデ ノー。 オカシー ナー。 マー アイダケ オッタ スズメガ ウチノ アノ
見えないので ねえ。 おかしい なあ。 まあ あれだけ いた すずめが うちの あの
ノコジャケ(注140) オランノジャッタラ ウチノ イネ ツクル オリニャー 「ヨシザワサーガ
農家 だから いないのだったら うちの 稲を作る 時には 「よしざわさんが
アイマデ コワイ オモイニ アワイデモ エカッタノニ ノー。」ト オモーガ ノー。
あんなにまで こわい 思いに 会わなくても よかったのになあ。」と 思うが ねえ。

B ムカシヤッタラ ナン ナンマン ユーテ オッタンジャ ワノ(注141)
昔だったら 何万 といって いたのだ よねえ。

C ヤッバリ イネナンカ ツクッタラ イネニ ヨッテ クルン。 ソーユー コトワ(注142) エサ
やっぱり 稲なんか 作ったら 稲に 寄って くる の。 そういう ことは。 えさ
ガ ナイ。 ナイケン ナー。 (B ヨッテ コン。)
が ない。 ないから なあ。 (B 寄って こない。)

A ヤー ヤッバスィ ヨッテ コーデ ナー。 (B ヨッテ コン カー。) ヨソニャ
いや やっぱり 寄って こないで ねえ。 (B 寄って こない か。) よそには
オルンカ シランガ コノ ホーニワ ヨイヨ スズメ オラン。 ハヨ フシ
いるのか (どうかは) しらないが この 地方には 本当に すずめは いない。 まあ 不思
ギヤ ワエー。
議だ よ。

B タベルモンガ ネアー ワイノ。
食べるものが ない よねえ。

A ホンドニ フシギナ。
本当に 不思議だ。

E 昔は悪さをして一生懸命減らそうとしたのに。

A ソー サセタ。 ソート シテモ ナカナカニ ヘランダンンジャケー。 エー。 ホジャケン
そう させた。 それに しても なかなか 減らなかつたのだから。 ええ。 だから
ナー。 タマゴオ モッテ クルンガ アルー ウマレダチオ モッテ クルンガ アル ナ
ねえ。 卵を 持って くるのが あるし、 生まれたてを 持って きたのが ある ね
ー。 (C アー。) エー。 ソレコソ シヨッタ ワエ。 ワシラー モー チャーント
え。 (C ああ。) ええ。 それこそ していた よ。 私たちは もう ちゃんと
ゼニオ(注143) アギョッタケン ノ。 ンデ モテ キテ アギョッタケ。 ウ ソレオ
お金(注144)を あげていたから ねえ。 それで 持って きて あげていたのだから。 それを
モー ホジャケン 「アラ オマエラ イマ モッテ キタ ブンジャロー ガイヤー。」
もう だから 「あら おまえたち 今 持って きた 分だらう が。」

「イヤ ソーじゃ ナイ ンデー。」 「イヤ ソーじゃ ナイ コト ナー。 コリャ ナ
 「いや そうでは ない よ。」 「いや, そうで ない ことは ない。 これは 何
 ンビキ ヤッパリ ツイジャー。」 ユー(注145) 「ツ ツリナ カタジャー。」 ユーテカラニ(注146)
 匹 やっぱり 同じだ。」 (注147) と言って 「同じ ものだ。」 といって
 ユータ コトガ アルノー ワ エー ワスレン ワエ。
 言った こと があるのを(注148) 忘れられない よ。

C スタ ソレ スエ ハイッタママオ モテ クル ン。
 そしたら その 巣に 入ったままを 持つて くる の。

A スー スー ソー。 スーママオ モテ クル ン。
 巣, 巣, そう。 巣のままを 持つて くる の。

C フーン。 ドビンゴヤラ イロイロナ モノヤ
 ふうん。 ドビンゴやら いろいろな ものや(注150)

A エー。 ドビンゴヤラ タマゴヤラ ノ。 ソノママオ モテ クルンジャケー。(注151) (C
 ええ。 ドビンゴやら 卵やら ね。 そのままを 持つて くるのだから。 (C
 アー。) (注152) タマゴナラ タマゴオ モテ クルンジャ ナエンジャケー。 ソーユー コト
 ああ。) 卵なら 卵を 持つて くるのでは ないのだから。 そういう こと
 じゃ。
 では。

D ドビンゴ ユーンワ アカチャン。
 ドビンゴ というのは 赤ちゃん?

A ソー ソー ソー ソ。 モー カセッタ スグノ。(注154) (C アー。) ケモ ナンニ
 そう, そう, そう, そう。 もう 解った すぐの。 (C ああ。) 毛も 何にも
 モ ハエトランノ。 (C フーン。) ソガーナノ モテ クル ン。
 生えていないの。 (C ふうん。) そういうのを 持つて くる の。

しまいに風呂に入る者は (5分25秒)

- F 野 瀬 ヒサノ 氏 (女 明治30年生 80歳)
- G 郷 田 キシノ 氏 (女 明治33年生 77歳)
- H 岡 田 明 人 氏 (男 明治41年生 69歳)
- I 上 田 矢太郎 氏 (男 明治36年生 74歳)
- J 上 野 智 子

H オイトータラ ミンナ カンデ シマウ。
 (菓子)を 置いといたら 全部 食べて しまう。

F フロモ カンダラ エー ワイナー。 アンタ。 (笑) フロモ ナンジャー ワイナー。
(注155) 風呂も, 食べたなら いい よね。 あなた。 風呂も 何だ よね。
 モー ホントニ キンジョジュエガ ナイ モナ モー イリニ キヨツタンジャケン ナ。
(注157) もう ほんとに 近所中が (風呂の) ない 者は もう 入りに 来ていたんだから ね。
 サカエラガ シマズト デキテー モリワakit シキシマト シケンジャッ
(注158) 栄 (屋号) らが 島津 (屋号) と できて 森脇 (屋号) と 敷島 (屋号) とで 4軒だった

タガ。 マー アノ ジブンニヤ ミナ クニン ジューニン オッタケン ノー。
が。 まあ あの 時分には みんな (家族が) 9人や 10人は おったから ねえ。
(H ホー ヨ。) シマイニ フロ イル モナー。 (一同 笑)

(H そう よ。) しまいに 風呂に 入る 者は。

H ドロドロ ドロドロノ ナカエ ハイル ノヨー。

ドロドロ ドロドロの 中に 入る のよね。

F ソガナ ノヨナ。 ナニ。 ソレガ マタ イマノヨニ ソトデ スラン。 ナカデ ドーテ
そんなん のよね。 ねえ。 それが また 今のように 外で 摺らん。 中で どうし

ヌカデモ ツカウンジャケン ナニ。
(注160)

ても 糠でも 使うんだから ねえ。

H モー ユモ イッサイ ソトニヤ ダサンノヤケー。
もう 湯も いっさい(湯舟の) 外には 出さないのだから。

J 糠で?

F フロン ナカデ スルンジャケー。
風呂の 中で 為るんだから。

J 糠をつけてこうゴシゴシ……。

F スカブクロ ヌーテ ナ。 (J 糠袋?) オナ オンナワ ナ。 (J はい。) ヌカブ
糠袋を 縫って ね。 女は ね。 糠袋を

クロ ヌーテ ドーテテ……
縫って どうしても

H セッケンノ カワリニ ヌカデー……
石けんの 代わりに 糠で……

F スル ノヨナー。 ソシタリ アノー アラエコ ユー モンガ アッタ ワイナ。 アラ
摺る のよね。 そうしたり あのう、 洗い粉と いう ものが あった よね。 洗い

エコ ガ マー エー ノヨ ナ。 オヤケン アンタ シマエニ フロー イル モノワ
(注164) が、 まあ 良い のよね。 そうだから あなた 最後に 風呂に 入る 者は

ホントニ ドロドロ ヌーナ。

ほんとに ドロドロだ よね。

H セッケン ツカイヨッタナー カワグチノ サコーヤハングライノ モンデ。 (G
石けんを 使っていたのは カワグチの サコーヤハン(屋号) ぐらいの もので。 (G

ホー ヨ。) (一同 笑)

そう よ。)

G 「イーユデ ゴザイマシヨーガ ナー。」 ユーテ ノー。 (笑) (F
「いい湯で ございましょうが ねえ。」 と言って ねえ。 (貰い風呂に行った。) (F

ホー ヨ。) 「シター セッケンオ アライオトス。」 イヤー アノ ジブンニ ア
そう よ。) 「つけた 石けんを 洗い落とす。」 と言えば あの 時分には あ(身体

スンデ ノチニ ヒツ アノ ツキヨッタ。
を洗って) すんだ 後に あの つけていた。

F ツキヨッタンジャ。 (笑) (J ふーん。) (笑) アイテ ダエズノー トーブ トッ
つけていたんだ。 ああして 大豆の 豆腐を取っ

- タラ ダーズノ カラオー トットイテ (G トットイテ ノー。) ソレオー ツコニク
 たら 大豆の 殻を 取っといて (G 取っといて ねえ。) それを 使ったり
リ (G ツコニタリ ナー。) ナー。 シヨッタガ。
 (G 使ったり ねえ。) ねえ。 していたが。^(注169)
- H アレモ セッケンノ カワリに ツコニタリ シヨッタ ワイナー。
 あれも 石けんの 代わりに 使ったり していた よねえ。
- F シヨッタ ワイナー。
 していた よね。
- G ヌカト マゼテ イッショニ ノー。 ツコニタリ シヨツ……
 糠と 混ぜて 一緒に ねえ。 使ったり して………
- F ムカシノ モンノ コト ユータラ ホントニ ウソ ミタヨーナ ワエナー。 (G ウソ
 昔の 物の ^(注170) ことを 言ったら ほんとに 嘘みたいだ よねえ。 (G 嘘み
ミタイナ ノー。)
 みたいだ ねえ。)
- H センタクモノ ジョージュヤ セッケン ツケラ ツカヨリヤ ヘナンダケン ナー。
 洗濯物(にも) しょっちゅうは 石けんを ^(注171) 使っては ^(注172) いなかったから ねえ。
 (F ホー ヨ。) ユデー……
 (F そう よ。) 湯で………
- F アノー ヘテ ハイデカラ アクー ハイノ ナニガ アクガ ヨー オチル ユーテ
 あのう、そして ^(注173) 灰で あくを 灰の 何が あくがよく 落ちると 言って
ナ。(J はあはあ。) オーキー ナニエー ササラ ユー モノオ コー サーシトイテ
 ね。 大きな 何へ ささらと いう ものを こう さしといて
ナ。 ソレカラ ミズガ タレルノ ソレオ ドーテテ イマノ センタクコミ
 ね。 それから 水が 垂れるのを、 それを ^(注174) どういうかと言うと 今の 洗濯粉みたい
タイナ モノ ヨナ。(笑)
 な もの よね。
- J ササラというのは何ですか。
- F ササラ ユータラ コー ヒゴミタイナノ エナ。 アノ マチニー ワシラガ イタオリ
 ささらと いったら こう 籤みたいな ^(注175) ね。 ああ、 街に 私らが おったお
ソガニ シヨッタ ワエナ。 アノー ヒゴミタイナ モノ アンター ソノー オリ
 りに そんなに していた のよね。 あのう、 籤みたいな ものを あなた そのう、大
キー ナニエー ハイオ イレテ アクオ トルンジャケ ナー。 ハイノ ミズオ トルノ
 きな 何に 灰を ^(注176) 入れて あくを 取るんだから ねえ。 灰の 水を 取る の
ヨナー。 センタクスルノ ニ。 ソレオ アノー コー アナエ サーシトクト ナ。 ポッチ
 よね。 洗濯するのに。 それを ^(注177) あのう、 こう 穴へ さしておくとも ね。 ポッチ
リポッチリ オチョーリマシタ ワエ。 ハイノ ミズガ ナ。
リポッチリ 落ちていました よね。 灰の 水が ね。
- G ハイオー イレテ。 ワシヤ ソンナン シランガ ユーテ。
 灰を 入れて。 私は ^(注178) そんなのは 知らないが
- F エー。 ソナ アノー マツヤマノ ホーデ ナ。 ソガニ シヨッタ ワエナ。
 ええ。 ^(注179) その あのう、 松山の 方で ね。 そんなに していた よね。

H ハイノコガ オチンヨーニ。

灰の粉が 落ちないように。

F ハイリノ コー オチンヨーニ。

灰入りの(粉が) こう 落ちないように。

H タタルノ ソコエ ター (F エー。) アナー アケトル。 アナン トコエー (F
(注180) 樽の 底へ (注181) (F ええ。) 穴を 開けてある。 穴の 所へ (F

ソノ ササラヲ サシタ ンヨ。) ミズ デルトコエ ナニオ タケオー (F エー。 サ
その ささらを さした のよ。) 水が 出る 所へ 何を 竹を (F ええ。 さ

サラー サーシトイテ ナー。) コ コガナ タケオー サシコンデー。
さらを さしておいて ねえ。) (注183) こんな 竹を さしこんで。

F エー。 ソレ ソレガ マタ コンモリコンモリシタ アノ ヒゴジャケン ナ。 ソレオ
ええ。 その それが また コンモリコンモリした あの、 籤だから ね。 それを

モー コー シバツテ ヘテ ソレカラ オチル ミズヲ センタツコニ ツカイヨッタ。
もう こう しばって そして それから 落ちる 水を 洗濯粉として 使っていた。

H ナ アノー ナカ (F エー。) トーツテクル ミズヲ
(注186) あのう、 中を (F ええ。) 通ってくる 水を。
(注187)

F ミズ キーレナンガ デル ワイナ。 (H ソー。) (J ふーん。) ソガニ シデー
(注188) 水は きれいなのが 出る よね。 (H んん。) そんなに して

ナーニシタラ ノミノ クソデモ ヨー オチル ユーテ。 (一同 大笑)

何したら 蚤の 糞でも よく 落ちると 言って。

H ホンマー。 ノミノ クソガ ダイブ ツキヨッタケン ナー。 (笑)

ほんとに。 蚤の 糞が だいぶ ついていたから ねえ。

F ソガニ シヨッタ ワエナー。 (笑)

そんなに していた よね。

H シロイモノ キトツタラ ノミノ ノミノ クソデ (F エー。 ノー。) マッカニ ナリ
白いものを 着ていたら 蚤の、 蚤の 糞で (F ええ。 ねえ。) まっ赤になっ

ヨッタケン ナニ。

ていたから ねえ。

F オチニクテ ナー。 アレガ。 (H エー。) ホデ ワシジャー……。

落ちにくくて ねえ。 あれが。 (H ええ。) それで 私は

J 赤い色になるわけですか。

F イマー ノミドモ オッタラ オーゴトジャガ ムカシノ モナー ヨールデモ コドモノーデ
今は 蚤などが おったら 大事だが 昔の 者は 夜でも 子供のでも

モ (G ホー ヨー。) ヒロテ セツテ ナー。

(G そう よ。) 拾って やって ねえ。

G ノー。 イマゴロ ホントニ カヤオ ツツテ キャノ ナカデカラ……

ねえ。 今ごろ ほんとに 蚊帳を 吊って 蚊帳の 中で……

F アッチ コロガシ コツチ コロガシ シテ ノミデモ ヒロテ ヤリヨッタガ。 ホントニ。
あっち 転がし こっち 転がし して 蚤でも 拾って やっていたが。 ほんとに。

(J ああ。) イマワ ホントニ ノミオ ミョーモ オリヤセン ナイ。
今は ほんとに 蚤を 見ようにも ありはしない よね。
(注189)

G ミヨ一モ オリヤセン ノ一。 (一同 笑)

見ようにも おりはしない ねえ。

H デンキガ ナイ。 ラン (注190) ランプジャケン ノ一。 (F ホ一ヨ一) (G ホ一ヨ一
電気が ない。 ランプだから ねえ。 (F そうよ一) (G そうよ
一。)
ね。)

J ランプの油は、何を使っていたんですか。

H セキユーデス。

石油です。

F セキユー ヨ一ナ。 (J ああ、石油。) ホテ コーマエ (注191) アンタ ニブランプデカラ
石油 よね。 そして 小さい あなた、 2分ランプで、
ワタシラー ハタオル ユータラ カスリオル ユータラ ソレデ オリヨッタンジャケン
私らは 機を織ると いったら 飛白を織ると いったら それで 織っていたんだから
ナー。 (H 咳払い)
ねえ。

H マメランプ ユーノモ アッタンヤケー。 コーマイ オリニ ノ一。

豆ランプと いうのも あったんだから。 小さい ところに ねえ。

F アッタ ワエノ。 マメランプ。

あった よね。 豆ランプ。

H フロヤ ナンカエ ハエル トキニワ マメランプワ (F マメランプ。) (G マメランプ

風呂や 何かに 入る 時には 豆ランプは (F 豆ランプ。) (G 豆ランプを

ツケテ ハーリヨッタ ヨナー。) マメランプ ツケトイテ ナ一。 アブラガ ヨケイ

つけて 入っていた よね。) 豆ランプを つけておいて ね。 油が たくさん

イルケニ一……………

要るから……………

F アノ (H アブラ一…………) マイトノ一 シンデ ナ一。

あの (H 油…………) 真糸の 芯で ねえ。

H ホ一ヨ一。 アアレ イチブモ ナイ ワエナー。

そう よ。 (注192) あれは 1分も ない よねえ。

F ヘエー ナエ ワエナー。

ええ。 ない よね。

H ニブランプジャノー ゴーヨソ…………

2分ランプだとか 5, 4…………

F マメランプワ シテ コーマエ (注193) ノ ランプヤハンガ…………

豆ランプは そして 小さいのを ランプ屋さんが…………

I ゴブランプ ユータラ モー オーキナ モノ ヨネ一。 イマ…………

5分ランプと いったら もう 大きな もの よね。 今…………

H アー ゴブ ハチブ ユータラ モー (注194) ホコラレヨッタ ヨノ一。

ああ 5分 8分と いったら もう (注194) 誇ることができた よね。

I ハチブ ユータラ モー (F ハチブ ユータラ オーカタ…………) イマゴロノ ハクシヨク

8分と いったら もう (F 8分と いったら おおかた…………) 今ごろの 白色ランプ

グラナー……

位には……

F イマ モー ランプが アル イヤ ナカロー デー。

今は もう ランプが 有る 家は ないだろう よ。

G ハチブヨリー ウチニヤ アレヤ マダ ↑。

8分より、^(注195) 家には あれは まだ ね。

F アル カエ。

ある かい。

G アル ガフ。

ある がね。

F オ——。

おお。

G アノー ナンジャ—ガー アレヨリ オーキー ランプ ナカットロー ガナー。

あのう、何だが あれより 大きい ランプは なかっただろう がね。

F エー。ハチブヨリ オーキナナ ナエー。

ええ。8分より 大きいのは ない。

H エー。ハチブ— ユー ナンボガ イチバン オーキカッタ ヨナー。

ええ。8分と いう いくらの^(注196)が いちばん 大きかった よね。

F サンプニ ゴブニ ナー。①

3分に 5分に ね。

G ゴブニ ナー。

5分に ね。^(注197)①

F ニブテ—……

2分で……^(注198)②

H ハチブノガー アノ……③

8分のが あの……^(注199)③

I ハチブア ア アノッコニ アリマス。

8分は^(注198) あそこに あります。

アレ ウチノア アコ。ザンキニ アルノワ ソジャロ。アノ スミニ。^(注199)

あれ 家のは あそこ。座敷に 有るのは そうだろう。あの 隅に。^(注199)

I ア ホー カ。

あ そう か。

F アー アレ ヨ。

ああ あれ よ。

(注)

- 1 「ホントニ」の有声化。
- 2 [s] > [h]
- 3 「ケンド」に「ガ」が累加。
- 4 口が「ホゴ」(81を参照)のように大きく赤色をした魚。和名、カサゴ。「ヲ」は [wo]

- 5 「チーサイ」と「コマイ」の複合による造語。
- 6 「ホケ」は限定の副助詞「しか」。
- 7 「モテキテ」の「キ」脱落。
- 8 「ダェ」は [dæ]
- 9 「ホィ」は [hoi]
- 10 「ム」は [my]
- 11 高音連続の文アクセント。
- 12 「ン」は [nʰ]
- 13 「ネァ」は [neʰ]
- 14 一話部のように一続きに発音される。
- 15 「メァー」は [mʰaʰ]
- 16 「ニァ」は [niʰa]
- 17 「ナラナンダ ダロー」からの変化と考えられる。
- 18 「ジャ」は [ʒa]
- 19 「ココ」の長音の撥音化。
- 20 「イッベンドモワ」の音変化。
- 21 四国的なアクセント。
- 22 「トッテ」の言い誤り。
- 23 「カラ」に「ニ」が累加。
- 24 過去の体験話に出てくる話者自身のことば。「ナー」より品位のおちる「ノー」が用いられている。
- 25 間投話部。「アング」とも聞こえる。
- 26 「キレーニ」の音節転倒。
- 27 「シューガ」の言いさし。
- 28 ポーズあり。
- 29 「ユガイトッタロー」の言い誤りか。
- 30 「カライ」を強調。
- 31 一形容詞。
- 32 「デァ」は [dʰa]
- 33 「ギリ」は限定の副助詞「だけ」。
- 34 「フタイトコ」の意か。意味不明。
- 35 言いよどみ。
- 36 言い誤って、口ごもる。
- 37 「アッタ」の言いさし。
- 38 「テァー」は [tʰaʰ]
- 39 片手で「5」を意味する。
- 40 「デ」に「カラ」が累加。
- 41 40の「デカラ」に、さらに「ニ」が累加。
- 42 「オムギ」の言いさし。
- 43 ポーズあり。
- 44 「シタミ」の言いさし。
- 45 米揚箕。山口県大島。（『全国方言辞典』）
- 46 「ナンスル ワイ」の音変化。

- 47 一続きに発音される。「男子用とは、また、」の意か。
- 48 「アリオッタ」の言いさし。
- 49 「ワエ」は [waɛ]
- 50 長いポーズあり。
- 51 中島の北西に位置する島。地名に「ラ」が接続。
- 52 「ユー」が「ウー」に聞こえる。
- 53 「ウェ」は [we]
- 54 18に同じ。
- 55 「オコメ」の言いさし。
- 56 「ソーロリット オイテ」は、感じをこめてゆっくりと発音される。
- 57 抬頭後起型の語アクセント。
- 58 「ワン(A)」と「オジーサン(B)」とは姉弟の関係。
- 59 文末詞の一か。
- 60 「ネー ヨイ」が音変化したものか。
- 61 文意不詳。
- 62 言いよどみ。
- 63 「いつも」を強めた副詞。
- 64 笑いに消されて聴き取りにくい。
- 65 終止形。語尾が「ナ」。
- 66 「モテ」は「ながら」の意。
- 67 「フタニギリ」を補足したものか。
- 68 「ソレモ」が「サレモ」に聞こえる。
- 69 「ケ」は [kɛ]
- 70 「ト」が「タ」にも聞こえる。
- 71 言いよどみ。
- 72 文脈からは「男の子」の意。「ちーさん お嬢さん。福井・京都。」「ちーばー 次男。山梨。」(『全国方言辞典』)
- 73 「ナー」は [na*]
- 74 「オナゴガ」の言い誤りか。
- 75 18に同じ。
- 76 「エ」は「に」あたる。
- 77 「の」の省略。
- 78 「ニ」の [n] の脱落。
- 79 [modot:e] > [monte]
- 80 高音部から下降し、再び上昇する特異な声調。
- 81 「ホゴ」はてんびんなどにかける口の大きな籠。
- 82 「ス」は [su]
- 83 「ソ」は [sɔ]
- 84 「イチッパン」は [i~t̚i~b̄b̄an]
- 85 言いよどみ。
- 86 「ア」は「アスコ」の言いさし。
- 87 「エ」は [ɛ]
- 88 「ウエ」は [ʷe]

- 89 「ダ」は [da]
- 90 言い誤り。
- 91 「オマエカタ」の「エ」の脱落。
- 92 言いよどみ。
- 93 「ナンダイ」の言いさし。
- 94 言いよどみ。
- 95 「オーバーハン」の言いさし。
- 96 「ナントカシテ」以下「デキン モン カェノー」まで感情がこもる。
- 97 「ノー」と「コレオー」は一続きに発音される。「コノ」の前にポーズあり。
- 98 「キカエ」は [kikaɛ]
- 99 98に同じ。
- 100 [wo] > [wa]
- 101 「マタ」の言い誤り。
- 102 「タラ」の [r] 脱落。
- 103 [dekita] > [deketa]
- 104 「カェー」は [ka^e]
- 105 「レア」は [re^a]
- 106 104に同じ。
- 107 98に同じ。
- 108 「それの」の言いよどみか。
- 109 「ドノクリ」と聞こえる。意味不明。
- 110 「ツカイ」は [tsukæi] , 言い誤り。
- 111 言い誤り。
- 112 「カイ」は [kæi]
- 113 112に同じ。
- 114 「セワシーテテ」は「忙しくて」。「テ」にさらに「テ」が累加。
- 115 「ミデカラニ」は打消しの助詞「デ」に「カラ」が累加し、「見ないでおいて」の意。
- 116 言い誤り。
- 117 「ムギョ」は [mugj^o]
- 118 「モノスッゴイ」は [monosu^ogoi]
- 119 「シ」は [ʃi]
- 120 「リア」は [rⁱa]
- 121 「テンピ」は熊手のような箒木。
- 122 「サェー」は [sæ:]
- 123 この一文が聞きとりにくい。文意不詳。
- 124 得心の意の言いおさめ。
- 125 「ゼンプ」は区切るように発音される。
- 126 あいまい音が入る。
- 127 言いよどみ。
- 128 「ワェー」は [wa^e]
- 129 聞きとりにくい。
- 130 「マーヤイ」は「まあ、やれ」の意。感動話部。
- 131 この部分は聞きとりにくい。或は「この方には」の意か。

- 132 或は「オメァー シテ」(お前, そして)の間投語部か。
- 133 「エ」は [e]
- 134 18に同じ。
- 135 「ワタシャ」は [watʰʂa]
- 136 「ここ」の言いよどみか。
- 137 「スイ」は [si]
- 138 「ス」と「ズ」の間に摩擦音が聞こえる。
- 139 聞きとりにくい。
- 140 「ノーコ」は「農家」の意か。
- 141 「オットンジャガ ノー」とも聞こえる。
- 142 「ソーユー コトワ」は聞きとりにくい。
- 143 「ニョ」は [nj^o]
- 144 言いよどみ。
- 145 言いさし。
- 146 「ツイ」の言いさし。
- 147 「イ」が「リ」に聞こえる。
- 148 「ワスレン」の言いさし。
- 149 「ス」は [s^u]
- 150 聞きとりにくい。
- 151 「ジャケー」はきこえが微弱。
- 152 言いよどみ。
- 153 「ナエ」は [nae]
- 154 [kaet:a] > [kajat:a]
- 155 「フロモ」と言いかけて, H氏に対する言いかけがはさまる。
- 156 [wæ]にも聞こえる。
- 157 2音節目の長音は, 1拍分よりもやや伸びている。
- 158 1語ずつたしかめるように, ゆっくりと話している。
- 159 「シマズト デキテー」は昂揚した調子。
- 160 「ナー」は [na:]
- 161 「オナゴ」の言いさし。
- 162 H氏の言を途中から引き継いでいる。
- 163 「エ」は [e]
- 164 「ガ」の前にポーズあり。「アラエコ」と「ヌカブクロ」の判断に迷ったか。
- 165 文末調「ノヨ」が自分自身に対しての訴えであるのに対して, 「ナ」は他に対しての訴えである。したがって「ナ」の方が陳述性が強いと言える。
- 166 「マ」は [mɔ]
- 167 言いよどみ。
- 168 「ダェー」は [dɛ^u]
- 169 「シヨッタ」にも聞こえる。
- 170 言い誤り。
- 171 「セッケン」にも聞こえる。
- 172 「ツケラレンカッタ」の言いさしか。
- 173 「ハイ」は [hae]

- 174 「どうして」と「言う」との融合形と考えられる。
- 175 「ノイナ」という文末詞かとも考えられる。
- 176 「ハイ」, 「ハイ」の両様に聞こえる。
- 177 ポーズあり。
- 178 ポソポソ声でよく聞きとれない。
- 179 「ナ」は [nə]
- 180 「タル」の言いさし。
- 181 「エ」は [ε]
- 182 言いよどみ。
- 183 言いさし。
- 184 「小さい」の形容。
- 185 「ッ」は [ku]
- 186 言いさし。
- 187 「ヲ」がはっきり聞きとれる。
- 188 中国的な頭高型アクセント。
- 189 「ワイ」が「セン」にひかれて「ナ」に変化したものか。
- 190 「ランプ」の言いさし。
- 191 「マエ」は [mə*]
- 192 言いさし。
- 193 191に同じ。
- 194 3氏の声为重なり聞きとり不可能。
- 195 脈落不一致。「8分より……」と言いかけたが「8分ランプが家にある」ことの説明が先にきた。
- 196 「ハチブユーブンガ」, 「ハチブユーノガモー」とも聞こえる。
- 197 番号どうしが重なっていることを示す。
- 198 「アソコ」の言いさし。
- 199 この3文の話し手は、録音した家の奥さん(中年女性)である。